

また、新潟県動物愛護センターの遠山氏の報告では、柏崎市が発表した避難所開設運営マニュアルの中には、はじめからペットを連れて同行避難をすることが前提になったチェック項目があり、犬の大きさや飼育頭数などを記載する欄が設けられています。動物との同行避難という課題は、けっして動物を飼っている人だけの問題ではなく、地域全体の問題として人と動物の両方に手を差し延べるべき課題であるという指針が示された好例といえるのではないのでしょうか。

そして、神戸大学大学院研究科で都市安全計画の専門家でもある大西氏からはこれらの話を受けて、日常生活の中でどこにどのようなリスクが潜んでいるかを把握し、日頃から万が一のためにイメージトレーニングをしておくことの重要性が伝えられました。被害に遭うのは必ずしも在宅時ではないことが多いので、さまざまな状況に応じたシミュレーションをしておくことが大切です。

最後に、日本動物福祉協会の山口氏から同行避難について誤解されやすい部分についての具体的な説明がなされました。同行避難の基本は、飼い主が平時から備えておくということです。国や自治体は、あくまでも法律やマニュアルなどを策定し、救護および避難所への受け入れ態勢を整備することにありますので、家族の一員であるペットの命や幸せを守り、社会に対する責任を全うするのは、やはり最終的には飼い主なのです。そのために、日頃から各自で非常時に備え、地域の安全を自治体で守り、国がそのシステムを整備するということが強く求められているのです。



江崎保男氏



佐藤哲也氏



藤井啓氏

して頂き、一面的な対策の集合ではなく、「One Plan Approach」という多面的かつ統合的な対策の重要性について報告が成されました。

かつて日本全国に分布していたコウノトリは、兵庫県但馬地方の限られた場所でのみ棲息が確認できるまでに数が減少しました。兵庫県は、1999年に兵庫県立コウノトリの郷公園を開設して保護および繁殖を試み、2005年に野生復帰を開始しました。同公園の総括研究部長・江崎氏の発表では、コウノトリの野生復帰にはその個体がそれまでに生きてきた環境そのものの復元、ひいては我々人間の生活そのものを見つめ直すことが必要であるという考え方が示されました。我々日本人がこれまで農耕民族として培ってきた水田の生態系を見つめ直し、官民の連携で「人と自然の共生」の実現に向けた試みが紹介されました。

那須どうぶつ王国園長の佐藤氏からは、長崎県対馬にわずか70~100頭しか残っておらず、絶滅の危機に瀕しているツシマヤマネコについての調査報告が行なわれました。この報告では、県外の施設などで繁殖を行って対馬に戻すという生息地域外での保全に関する取り組みが紹介されましたが、2013年までは思わしい成果を得ることができませんでした。しかし近年、民間団体と環境省が連携し、域外で繁殖した個体を野生馴化して野生復帰させる国内初の試みとして推進されているとのことでした。

ゼニガタアザラシは、環境省のレッドデータに於いて絶滅危惧Ⅱ類に分類されていますが、その一方で、漁業にとっては害獣であるという一面もあり、また観光資源としての活用が進むなど、アザラシを巡っての人と動物との関係が複雑に絡み合っています。こうした現状について議論できる場として組織されたプロジェクトとっかり・代表の藤井氏から、人と動物、そして環境とのかかわりについて大きな課題を投げかける報告がなされました。

オーラルセッション 1

「食の安全／人獣共通感染症」

7月19日 14:30～17:30 / ラウンジ

お詫び

演者の都合により中止されました。関係者およびご来場の皆様にご迷惑をおかけしましたこととお詫び申し上げます。

オーラルセッション 2

「One Plan Approach ～野生動物と共存していくための包括的な取り組み」

7月19日 14:30～17:30 / ラウンジ



座長 高見一利氏

日本野生動物医学会の運営協力により、希少動物の保全活動を通して人と動物、そして生息環境との関係が議論されました。今回のセッションでは、コウノトリ、ツシマヤマネコ、ゼニガタアザラシの保全活動の内容と目指すべき方向を具体的に示